

第2回二本松市未来戦略会議 会議録

日時 平成30年11月8日（木）午後3時～午後5時
場所 アーバンホテル二本松「3階会議室」

1 開 会

（企画財政課長）

皆さんこんにちは

本日は、何かとご多用のところ、ご出席を賜りありがとうございます。
た。

只今より、第2回 二本松市未来戦略会議を開会いたします。

はじめに、市長よりごあいさつ申し上げます。

2 市長あいさつ

みなさま、こんにちは、本日は、何かとご多用にもかかわらず、第2回二本松市未来戦略会議に、ご参集いただきまして、誠にありがとうございます。

また、日頃より、市政各般にわたりまして、格別のご支援とご協力をいただいておりますこと、心より厚く御礼を申し上げます。

この会議は、二本松市の将来の飛躍と恒久的な繁栄・発展を目指して、全ての市民が幸せを実感でき、50年先、100年先、次世代を見据えた礎を築くために、市の特性を活かした自律的で持続的な都市づくりに向けて、専門的な知識及び民間の経営的な観点から各界、各層からの幅広い、ご意見、ご提言を頂くために開催するものであります。

8月の第1回会議では、亜細亜大学の栗田様より「若者、馬鹿者、よそ者がまちづくりに必要なわけ～まちづくりで若い人に参加して貰う秘訣～」と題したレポートを、ご披露いただき、議論をさせていただきましたが、若者の力を使うということは、地域づくりには、非常に大事ではありますが、いかに本気で若者を動かせるのかは、難しい課題であると再認識をしたところであります。

また、黒川先生からもご発言がございましたが、二本松市の特徴を活

かして何ができるのか、二本松市では、将来の飛躍のために何をすべきなのか。皆様の、豊かな見識と貴重な経験をもとに、これからの二本松市の飛躍と可能性について、長期的な視点、大所高所から、忌憚のないご意見ご提言を、ご提供いただければと存じます。

また、糠沢委員からも市の広報戦略についてご提言を賜りましたが、さっそく市役所の中で広報の在り方について検討して取り組めるところから進めていくということで、推進を図ることとしました。

一つ一つ、実行可能なものから実現を図ってまいります。

また、二本松市には、古くからの歴史と伝統があり、先人の教えが、脈々と受け継がれております。二本松市でも、先週の3日、土曜日に「二本松戊辰戦争戦没者慰霊祭」を100年ぶりに開催いたしました。この歴史に触れるたびに、私たちが今できることを精一杯、務め、次世代に引き継いでいくことを、改めて、心に強く思う次第であります。

また、菊の祭典「二本松の菊人形」も、今年で64回目を迎えました。が、藩政時代から菊の愛好者が多く、昭和の初期から町に菊人形が飾られていたことから、始まったといわれております。今年の菊人形は、11月25日まで開催しておりますので、機会がありましたら、ぜひ、足をお運びいただきたいと思っております。

本日は、よろしく願いいたします。

(企画財政課長)

次に、若干の事務連絡を申し上げます。

本日の会議の議事録及び議事要旨並びに会議資料は、原則、公開とさせていただきますが、公開することが適当でない事案もあるかと思われまますので、その都度、お申し出、頂くか、会議終了後に事務局までお知らせ願います。

また、本日の終了予定時刻は、午後5時とさせていただきます、引き続き、午後5時30分より懇親会を開催させていただきますので、ご協力をよろしく願いいたします。

それでは、議題、意見交換に入りたいと思っております。

ここからの進行は、コーディネーターといたしまして、福島大学副学長 伊藤 宏様をお願いしておりますので、伊藤副学長、よろしくお

願いたします。

(伊藤コーディネーター)

それでは、前回に引き続きよろしく願いたします。今日は4名の方がご提案をいただいております、それを踏まえて議論をしていきたいと思ひます。まずこの会議の趣旨を確認したいのですけれども、50年先100年先、次世代を見据えて礎を築くための都市づくりを考える会議の趣旨であります。それでは、私コーディネーター座長を承っておりますので、今後、会議の進め方について、後でご提案相談をさせていただきますと思ひます。

それでは、まず最初に今日レポートを出していただきました4名の委員の方から概略を説明していただきたいと思ひます。まずは糠澤委員から願いたします。

(糠澤委員)

何点かレポートとして提出させていただいたのですが、歴史的な大震災と原発事故のお亡くなりになりました浪江町の馬場町長さん、浪江町民も含めて多くの皆様が避難された。特に二本松市は避難者を受け入れ、市をあげて避難者をいたわり今日まできたわけでございますが、そのいたわりのゆえに精神面も含め市全体が震災疲れを少しおこしているところがあるのではないかと、私の私見ですが。そのうえで今、伊藤先生からありました10年30年50年100年後を考える前段として、二本松を取り巻く緑豊かな大自然、国立公園、県立公園、温泉、首都圏から新幹線でも1時間半恵まれた位置づけ再認識する必要がある。併せてこれも市長からございましたように歴史上の様々な遺産、それから伝統行事これらも再認識する必要がある。その中に朝河貫一博士はじめ幾多の先人偉人その人たちに歴史のある先人に学ぶという思いで、もう一度今までの資料でよろしいのかどうか。それから関連資料いろいろでていますが、本当のその資料で全国海外までメッセージとして伝わる資料なのか、見直しも含めてこの機会に考えるべきである。最後になりますが、現在県内に新聞社2社と地元で古くからの新聞社がありますが、地元メディアをもう少し上手に利活用できないものか。そういう両端の絆を急ぎ震災か

らのところでもう一度退避させておく必要がある。これが政治について、よしと避難されている浪江の方々も含めてもう一度二本松市全体に元気がでてくれば、それこそ30年後、50年後100年後のやるぞという前進のパワーにつながるのではないかということで、伊藤先生からご指摘のあった前段の精神面も含めて私なりの私見を含めて今回報告させていただいたというのが柱でございます。以上です。

(伊藤コーディネーター)

只今の糠沢委員からのお話しあるいはレポートにつきまして、何かご質問がございましたらご意見はまた後で頂戴するという事でよろしいでしょうか。では、続きまして栗田委員の方からお願いいたします。

(栗田委員)

今、糠沢委員のお話しに繋がってくるのですが、大学の教員ですので、若い人を育てるという意味で、地元の方が二本松に愛着をもって歴史に誇りをもって育っていかれ、外に出られても、そういうことが必要ですが、いろいろな素材があると思うのですが、今も戊辰戦争150年というところで二本松の少年隊は非常にシンボリックでございますので、今日も歴史資料館を観てかなり充実した内容で2時間観てもまだ観たりないところもございましたが、いろいろなかたちで本が出て歌謡曲も7詩くらいできて、まだ売り出し方、発信の仕方の余地があるのではないかと。例として挙げますと香川県さぬき市しど町の取り組みですが平賀源内が出たところで平賀源内学園という県立の高校で教員が取り組んでいてそれをベースに生涯学習でも源内塾を行っている。郷土の偉人の業績を高校生が勉強して、エレキテルのおこしかたを習得して、そして小学生に教える。学び教えることでまた学ぶという循環を作っていくというおもしろい取り組みをしております。さぬき市は人口4万人位ですが、そういうかたちで生涯学習とかボランティア学習ではかなり注目されているところですが、そういうふうなことを二本松少年隊のところ、できたらおもしろいなと今回レポートの趣旨でございます。

(伊藤コーディネーター)

ありがとうございます。只今のお話しなにかございますか。それでは、太田委員お願いいたします。

(太田委員)

二本松市を対外的にどうアピールしていくか、アイデンティティーをどう描くか、会津と同じように戊辰戦争、幕臣のために闘った歴史があると思いますが、悲劇に焦点をあてるよりも悲劇を乗り越えて世界に飛び出した人を二本松市が育てたんだと、自分たちの誇りにしたい。象徴的には世界の朝河貫一博士、みなさんご存じのとおりなので、省略します。それから富岡製糸場の一面に二本松と、ビジネスの世界でまだ証拠はなかったから、株式会社という名前はないけれど郷土史によると日本初の株式会社に相当するのではないかといわれ、ニューヨーク支店まで出すことに成功した山田修翁さんもいる。

文化の世界だと高村智恵子は今までのイメージだと男性目線で光太郎が愛した妻、病身で歩けないそういう受け身の智恵子像なんですが、二本松の中では、新しい女性像として大変活動しながら男性優位社会と戦った先駆けなんだというふうに、イメージ転換して新しい時代に世界に飛び立った人たちが二本松から生まれているんだということを対外的にブランディングし、また我々もそういう先人がいるんだ、自分も頑張らないと、というふうな気持ちになれるのではないかと思います。

初頭教育では、秋田県が地方でありながら日本一とうたっているのですが、そうゆう例をみれば中等教育・高等教育で、なかなか日本一になれないが、初等教育ならば比較的達成が容易であろう。それが自信に繋がるし、今、福島県にも震災以降いろいろな、産総研であるとか教育面の高いお子さんお母さん方の職場というのはできている。みなさん単身赴任でいらっしゃる。子供たちの教育に不安だから、子供たちは東京に残してということになってしまうのでその点、初等教育で二本松は、日本トップレベルということであればみんな子供たちを連れてくるであろう。その子供たちが高校、大学に入るときに二本松市から出てしまう。東京に行くことは構わないことであって、でも、そういう人たちもやがて大人になって自分の子供を持つ時になって、二本松の野山を駆け巡って虫取りを

したり、川で遊んだりしたというところで自分も子育てをしたいということで、若いお父さん、お母さん、小さい子供を持つ人たちが、働き盛りの人たちが二本松に安心して家族を連れてくれる。そういうことであれば、とりあえず良いのではないかなと思います。

最後に観光のために文化より、なんといっても食だと思うので、私もどこか行きたいというときに歴史的な、すばらしいものがみられるのは、有意義にはなるが、決め手はおいしいものがあれば出かけると思うので、今、二本松は比較的質素な土地柄で、「ざくざく」とかは質素な中から生まれた郷土食だと思いますが、そこにとどまらず、外から引っ張ってこれるおいしいものが出来れば良いのではないかという話をさせていただきました。以上です。

(伊藤コーディネーター)

ありがとうございました。只今の太田委員お話を質問はありますか。よろしいでしょうか。今日、ご欠席ですが、東北サファリパークの熊久保委員から資料が届いておりますので、事務局の方から簡単に説明をお願いいたします。

(事務局 遊佐)

それでは、事務局の方より簡単にご紹介させていただきます。本日もご欠席ではありますが、株式会社東北サファリパークの代表取締役の熊久保さんのほうよりご提案の資料が届いておりますので簡単にご紹介させていただきます。

東北サファリパークでは、県内には少ない大型の動物園、動物にふれあえる施設として唯一の施設でありまして、東北サファリパークからのご提案としましては、動物園として当然動物を見るのは基本になりますが、大型の動物等を活用しまして、子供たちの人材育成とか動物にふれあえまして、子供の豊かな人格形成に寄与するために行政だけではなく、いろいろな民間の方と連携した取り組みをおこなっていったらどうかというようなことが、1つ目の提案でございます。2つ目は、東北サファリパークの中にエビスサーキットといいまして自動車やバイクのサーキット場がございます。現在、そこには多くの外国からそのサーキットを利用す

る方が訪れています。その外国から来る若者達と交流を深める活動であったり、その外国から来た達を広報宣伝大使のようなかたちでうまく活用して、二本松のPRをはかれないかというような提案がありました。最後には、その外国から訪れる方たちがエビスサーキットで、ドリフト走行とかバイクの練習をしに来るわけですが、その方々が観光ビザでおいでになります。観光ビザですと最大90日の滞在が認められるわけですが、その技術習得には最低1年位かかるということで、観光ビザですと一旦帰国しまして、また来るということで1年間に2回、90日の2回で180日の滞在しか認められないということで、観光ビザで滞在する特別な目的、トレーニングをするという目的には、そのビザの期間を延長するということが特区制度を使ってできないかと提案があったところがございます。以上でございます。

(伊藤コーディネーター)

ありがとうございます。一応、コーディネーター座長という役ですので、今後この会場をどのようにやっていくか考えておりました、実は予定といたしまして、来年の2月に第3回目を開きまして、その3回でもってなんらかの形でこの会議から提言的なことが出来ればということで事務局から伺っております。ただ、皆さんいろいろなご意見があつてなかなかご意見が収束しないということも考えられますので、その時は出たご意見を事務局の方で何らかの形でまとめていただいて、今後の市政なりに反映させていただくというかたちになると思うのですが、できればそれは避けたくて、この戦略会議で何らかの提言が出来ればというふうに考えております。基本的には先ほども言いましたが、50年先、100年先の未来の都市づくりを見据えてということですので、簡単に言えば我々の世代は次世代にどんな二本松を残せるのかということが、我々の使命というか任務だと思っております。それでは、いろいろなお立場で直近のいろいろな課題や問題があると思います。それは、どちらかというと行政がすぐに対応すべきことであって、今回の長期的な都市づくりのビジョンとは直接には関わらないかもしれない。とは言っても、直近の問題であり未来と繋がっているわけですので、できましたら中期的なビジョンが提言というかたちで提案できるとすれば、これに繋がるよう

な具体的な直近の今なにができるのか、今できることを提言の中に盛り込むことができるのではないかと考えております。

もう一つビジョンを考えるときにあまり総花的というのは、あまりこれもこれもこれもでは、重点がなくて、思うようにならない。いくつかの重点とか軸というものを考えて、それを中心にビジョンを考えるとというのがいいのかなと考えております。

もう一つは、ビジョンも大事ですが、例えば東京オリンピックの時におもてなしというのがありました。これから市のアイデンティティであるとか、市や市政の道しるべなるようなことを我々は考えていこうというわけなんです、その時のスタンス、精神そうゆうものでも、私はいいかないかなと考えています。東京オリンピックのおもてなしに相当するような、何か二本松としてはこういうコンセプト、スタンスでいろいろなことをやるんだよというような考え方も良いのかなというふうに思ったりもしています。いずれにしても今日の2時間と次回の2時間で何かまとめ的な事をできたらというふうに思いますので、できれば、建設的な前向きなご議論をいただければありがたいなと思います。それでは4人の方々の提言、レポートにつきまして、何か御意見等ございましたらお願いいたします。

(安齋委員)

共通するのは、未来というのは米百俵ですよ。やはり太田さんがおっしゃった子供たちに何を学ばしていくか。お説教ではなく学校の雰囲気、どうしてそれを作っているかということだろうと思います。

本当に大山忠作先生の事がでましたが、二本松に文化勲章2人ももらっているんです。3人目が今年だと思ってたけど、はずれましたけれど。福島県でたった3人しかいない。草野しんぺい、あとは二本松、高橋信二先生。CTスキャンをつくってノーベル賞直前に亡くなってしまってアカデミー賞で終わった人です。それから大山忠作さんですね。およそ日本中で約400人、昭和12年から、約400人の文化勲章受章者の中で福島県は3人しかいない。そのうち2人が二本松市である事実は極めて高い。

私の田舎、私の生まれたふるさとは、紙ができています。文明そのもの

です。紙というのは、紫式部とか清少納言がこよなく愛した陸奥の国の紙です。二本松の宣伝には、なかなかでてこないのですが、原材料は、万葉集に出てくる安達太良のまゆみの川で作った極めてきれいな。その歴史を保てなかった。兄が亡くなったこともあるが、いところが道の駅で最後までやっていたが認知症になった。よそからきた人がかすかに行ってきた。もしあれが残っていたら正当なものができる。文明の発祥の地のようになったのだと思います。残念ですが、そういう歴史もあります。そういうことも含めてみんなに若い人たちに分かってほしいと思います。そのために上の人が教えるということが提案されます。

一方で学校の交流ですね。学校の交流をやってほしいです。先生も一緒について、おそらく生徒が減っているので、学校の建物そのものが残っている。机や椅子が残っていて余裕がある。それで交流を活発にすることによって、世界につながるような大きな自分の子供達の小さな所だけではなく、全体をみるような、そういう機会を作ってやってほしい。そんなにお金のかかることではない。

先生だけが一方的に教科書にそって教えるのではなく、生徒たちが、自ら啓発されて学ぶような雰囲気はどういうふうにしたら、作れるのか。こういうことを教育委員会と一緒に市にもやっていただきたいと思います。

我々の時にはないことも、スポーツでも凄い成績をおさめる人たちがこの地域に出てきています。カヌーなどオリンピック選手が訓練することがあります。色々な意味で、自然に恵まれているが、この活用によって生まれてくる。朝河貫一博士もおそらく、そうだと思いますが、戊辰戦争や身近な存在として子供達にも分かってもらう。そういうことが大事だと思います。

今回は民報・民友は朝河貫一博士を大きく報じてくれてありがたいです。ふるさとの新聞が全国的な関心を持った大きな記事を発信してくれたと感心しています。

それからサファリパーク本当に私、台湾の観光客呼んで、すごいですよ。これと岳温泉の富士急の夜行運転してくれているゴンドラ。そこから晴れた日にみる二本松のまちも星空もたいへんなものがある。みんなバラバラなんです。観光資源をどういうふうに位置付けて、泊まっても

らうか、ビジネスホテルが二本松にはアーバンホテルしかない。あと岳温泉だけで非常に残念です。

あと太田さんがおっしゃった食べ物。あの時に困ったのはお土産物です。台湾の人たちは日本と同じように箱で持って行って小分けできるような土産が好まれる。郡山のままだおるは小分けになっている。何か二本松の食べ物が本当にほしいです。ラーメンひとつではだめです。それとお菓子ですね。日本のテレビでは、玉嶋屋は有名でなじみがあります。海外にはちょっとなじみがないので、なんか工夫がほしい。ぜひお願いいたします。

(伊藤コーディネーター)

今まで、委員の方々からお話しがあつたので、ある程度共通のキーワードがあります。歴史・遺品・賢人であるとかそれを含めた観光、その観光の中には食というのが欠けているのではないか。その観光を軸にして、歴史、先人、食をうまく有機的に結び付けてうまく売り出し、発信する。それぞれが要素としては、それなりに存在するが組み合わせ結び付きがどうもうまくいっていないのではないかというお話だと思います。

(安齋委員)

ちょっと加えると安達ヶ原の黒塚の鬼婆だけで、高級な恋愛物語だというものもあります。だから、能の題材になっている。みんな勉強していない、こういった研究があつて智恵子抄の智恵子に繋がるのですね。

(伊藤コーディネーター)

実は、昨日、福島大学で、福島市の木幡市長をお招きして学生4人と市長と対談をした福島未来をみんなで考えましょうと、若者から意見を聞きたいとこういうコンセプトでおこなつた。若者から学生からどんな反響が出てきたかというところ、今の環境でいえば、福島には際立った特徴がない。観光がないと歴史もあまり感じられないとこういう話だったんです。でも、二本松は逆ですよ。観光の要素も資源もある歴史もある。にもかかわらずというところが、やはりあるのでそのへん若者でも非常に関心があるわけです。ですから若者の意見で不便である。大学が

非常に辺りなところにあるので、買物もなかなかできないそういう不満もいくつかあったのですが、際立った特徴がないというのが、福島に住んでいる若者の意見です。それ以外に、このようなものが良いのではないかと出たのは、これは二本松にはないものかもしれないですけども、先端産業の集積がほしいという話があります。これは、今の二本松ではちょっとハードルが高いかないという感じがします。あと若者が、いきいきしているまちがいいと、これは結果としてはそうなればいいですが、今の時点ではなかなか。実は福島には、4つの大学がありますが、郡山はどうも大学には恵まれていないところで誘致に失敗をしている。二本松はちょうど真ん中なのですが、それがあまりない。あと一般的な話としても住みやすいまちであるとか、人にやさしいまちであるとか。市と市民の距離が近いまちだとか女性が働きやすいまち。これは最近のコンセプトですよ。女性が働きやすくなければ、女性が定住して、次世代をつくっていくということには、なかなかならない。そういうような若者の意見がありました。明日の会議にいろいろ参考になるなと思って聞いていたところです。

(安齋委員)

前回、事務局の作ってくれた表をみると、隣の大玉は女性にやさしいから郡山、本宮、あるいは二本松市から移住している。何もない村だが人口が増えている。二本松の中では油井が人口が増えた。あれは駅ですよ。みんな高齢化時代は、病院や駅や介護等そうゆうのが、近い所にみんな寄るようです。まち全体のつくりも山奥の人にもやってあげなければならないけど、効率的にやるために、核をどこにもっていくか。これが市長、行政がこれこそ選挙で落ちるかもしれない。しかしそうゆうことをしていかなければ、行政の効率性を維持しつつ、キープする発展するというのは難しい。

(伊藤コーディネーター)

安達の旧道沿いが今、非常にお店がたくさんできたり、住宅ができたり、そもそも復興公営住宅が出来たというのが、きっかけだと思います。

また、地元の人の間では、安達駅前の通りに病院がたくさんあります。

これを全部たすと総合病院だよ。と言う人もいます。ショッピングセンターもあります。ある意味ではあそこだけで産業が、なりたっていることではなくて、福島のベットタウンという形になるのかもしれない。住みやすさという形では、二本松の中でも非常に新しい動きかなという気がしております。

(安齋委員)

杉田は、なにかしないのですかという提案です。

駅なのか道路なのかわかりません。しかし安達は成功しました。

(伊藤コーディネーター)

ひとつは、子供が高校に通う時に電車がないとなかなか不便なので、そうゆう意味では近くにJRの駅があると、昔の交通時代と比べると本数増えましたし、二本松市内には、安達、二本松、杉田という3つの駅があります。安達はかなり変わりました。あとは杉田ですかね。

(三保市長)

今、安達の駅付近に住んでおられる富樫縫製の富樫三由さん。まちづくりの先頭になって中心になってやっていただいているのですが、合併して二本松駅周辺を拠点都市ゾーンとして、それから安達駅、杉田駅については、サブ拠点。安達駅については、200ヘクタールの都市計画決定と33ヘクタールの農振除外をして基盤となる駅前広場とか駅舎の改築とか道路の整備については、市が先行して進めた。あとは民間開発、民間誘導をはかるということで、東口の整備。今、北口の整備を進めていて、商業施設とか医療施設を集積しているところです。今、二本松駅南駅前広場の整備、現在の駅前広場と同じくらいの面積。それから4号バイパスから駅につながる道路の整備、今進めているところです。それからもうひとつは杉田駅周辺についても同じく整備を進める。すでに着手しました。現在の駅前広場の整備と道路の整備。それから奥の松酒造とあるところに工業団地約10ヘクタール。杉田駅の東側の田んぼですが、そこに新たに駅前広場と東側の田んぼ沿いに阿武隈川に向かってそこを新たなまちづくりをするということで、ひとつは駅前広場を新たに作る。

それからその周辺に住宅団地それからショッピングゾーン、そこにはいる道路がないので、4号バイパスの西池団地の入り口から、駅に向かって道路の整備を着手しました。そういう面であらたなまちづくりを進めてまさに女性や若者を呼び込むことができる快適な生活環境整備を進めている。そういう目標に向かって今、進めているところです。スピード感をもってやることはやらなければならないということです。また富樫さん一生懸命市民との協働まちづくりをするということで、時には辛口の提言もいただいているのですが、それらも含めてやれることは全部やるとやらせていただいているところです。

(富樫委員)

安達駅のことが出たので、私が市民協働のまちづくりを安達駅前のNPOにはしていないのですが、行動しようという事で団体をつくっています。一番の問題は太田さんがおっしゃったように、私は教育だと思います。幼児教育でやっていくといっても、油井小学校の場合だけでみれば、児童数が増えて教室が足りない。それと駅前周辺に集積しましたから旧県道に自社工場が面しているのですが、そこが30分の間に130人の小学生が通ります。それで駅に来る人がいるので、雪が降ると大変なことになります。そういうところをすでにお願ひしているのですが、整備していった教育と一緒にやらなければ、だめだと思います。家をつくるのは、昔、ベイシアさんが来た時に、私が商工会長だったので、調査したことがあるが、外部からここに家をつくりたい動機というのは、1番は便利であることです。駅がありショッピングができて病院があつて全部そろっている。

だけどそれと同じくらいに子供を持っている人たちは、学校のレベルなんです。Aクラス、例えば二本松市だと南小学校、北小学校それと油井小学校、これはAランクなんです。他はCになってしまう。残念ながら全部あのあたりに集まってしまい周辺に広がりをもてなくなっている。ところが、中央部分が開発をやっているのですが、間に合わないというのが現状です。そのあたりが、今早くやらないと結局団地みたいに家はつくりました。たぶん子供達は出て行ってしまいますから高齢してしまいます。例えば福島の大蓬萊団地のようになるのではないかという不安が

あります。

(伊藤コーディネーター)

空き家がいっぱいで、空き家が全然売れなくてその空き家をどうするかというのを大学の先生方で研究されている方もいらっしゃる。

蓬莱団地には、福島大学の先生方も多い。あそこに住んでいる方は、ほぼ退官されたような先生方で、若い先生達はほとんど住んでいない。

(糠沢委員)

新入児童がゼロに近い。2つあった小学校が1つとつくに閉鎖された。

(富樫委員)

あと近所で智恵子団地という団地があるのですが、そこもそうです。子供がいなくなった。そうすると後は欠けるようになってくるので、なんでこうなるのだろうとなったときに、先ほど長期的なビジョンと言いましたけれど、結局働く場所がない。その働く場所が。自分自身の反省の意味でいうのですが、下請けしかないので製造業に偏っている。第1次産業、第2次産業、二本松経済は第1次産業が一番大きい。第3次産業が発達しない。ところが、今世界的にみてもITやIoTとかあるいはネットになってくると結局第3次産業をやれるようなところを作っていないとだめだと思う。

糠沢さんが書いているどう発信するかこれが、ものすごく重要なのではないかと思います。

(安斎委員)

再来週から2週にわたって、東洋経済で私は浜田幸一と渡辺つとむと議論してます。再来週に出ると思います。今、非製造業は、日本全体で5000万人を超えている。製造業1000万人しかいない。非製造業をどうするか考えないと日本経済は、経済成長率が上がらない。物価も上がらないのはそこです。

(富樫委員)

1番は、やはり、我々は、第2次産業の工業出荷額が多いです。と言いつつも結局は下請です。労働生産性が非常に低いわけです。これを直すのに県は一生懸命、知財、知財、とやっているのです。私もたまたま特許を出して開発してやっているのですが、宣伝活動に入る時に広告代理店が県内ではまったく通用しない。しょうがなく、私はネットを作るのを全部東京でやっている。この前、特許事務所の先生が来られて結局シンクタンク的なものを作らないとというお話がありました。

(安齋委員)

そこが行政なんです。本当に自分で介入するくらい民間の分野に口出し、自分で能力を開発してやらないといけない。本当は、市役所はシンクタンクの最たるもの。そうならないといけない。

それから学校も先生が余ってきている生徒が減っているのです。その余った先生をどうするか。みんな定年までいくのですか。この活用を考えないと本当に少子化の時代を考えないといけない。

(山崎委員)

ひとつは山奥にいる暮らす人間としては、そこに暮らす者の開きが多いという覚悟。それに対する行政の考え方が、会議のところと、都市化をめざすこの二本松、観光をめざす考え方を分けて考えないといけないのかなと聞いてみました。

私、嫁いでウン十年ですが、生まれも岩代で浪江寄りに嫁いだのですが、地区の総会ですね。区の総会ですが、お父さんたちが、皆こぞって行っていたが、今、区役員と理事会の役員くらいで10数人でやるようにそういう状況になってしまった。なぜ、みんなでこの地区のことを考えないのだろうと思ったときに、ひとつは、度々でている食の話ですが、以前は区役員の奥様達が一汁など作って飲みましよう、酔うまで言いたいことを言っていたのですが、だんだんオードブルが出てきて、今度は缶ビールと乾き物だけで、パタッと人がこなくなりました。やはりお母さんたちの力を使ってもっと地域に貢献させるというそういうパワーを使うべきではないか。主人が区役員をやっているが、お母さんたちを募って皆で出ていて皆で一汁を持って行って、賑やかにやろうと思うが

どうでしょうと。自分の亭主でさえ自分が区役員になるとやめてくれと言われるが、ここからくどきおとさなければいけないなと思います。

男社会だけではなく地域の女性の力を出して、山奥で生きるものとしては、やはり自分たちがここで生きる意味をみんなで力を合わせて楽しく暮らしていくというそういう意識を持たせるということが、とても大切なんじゃないかなと思って今、生きています。

実は私以前、道の駅さくらの郷というところで本当に市の方、そして市長さんから大変お世話になりました。小さなビニールハウスからはじまりまして、道の駅になったのですが、本当に自分としてはそのようになるとは夢にも思っていなかった。本当にお金もなくてイベントで何かを作るにしても、おにぎりとお漬物それでもありがたいという気持ちとかみんなでやろうという思いがあれば、豪華でなくても人は動くのです。また協力してねといって。だからすごい食べ物というのはとても大切だから、豪華でなくても、お漬物と一汁みたいのがあれば、もつともつと活用するのではないかと思っています。秋田県のお話しに子供さんが学歴、学力もあると私も以前視察をさせていただいたのですが、特別すごく自分に頼っているとかではなくて宿題とかで力を入れられているらしいのですが、とても驚いたのは全国平均よりレベルが高いのは家族そろって朝ごはんを食べる。全国平均より10ポイント高いという当時のお話で聞きました。今の時代はなかなか難しいのですが、やはりそういう家族の絆とか、基本的な生活というところが、とてもとても大切なのではないかな。家族そろって朝ごはんの二本松市とか、そういうところにとっても力を入れたらいいのではないかと思っています。逆に秋田県に行くと寿命が短いのですよね。どちらが良いのか。頭がいいの方がいいのか。健康寿命の長い二本松とか取り組むとかそういうところですね。先ほど学力の魅力のある学校に人が集まるというのはまさにそのとおりです。やはりそれなりの親も学力のある人たちとかそういう企業が来ないと。以前、茨城の牛久の話ですが、小学校が増えているということなんですね。つくばみらいがすぐ隣でベットタウンになっていて、そこにはIQの高い子供たちが集まってくるからということです。ちょっと言いが悪いですが、勘違いといっては失礼ですが、そういうところに行けば自分の子供も頭が良くなるのではないか。そういう産業とか市長さんが頑張

って引っ張ってこれるのであれば、少し魅力のまた違う意味の二本松が出せるのではないか難しい話とは思いますが、ここだけでは簡単に言えますけど、そんなことを思っています。

お祭りも大人だけいなくて子供神楽になって、子供たちもスポ少などで忙しく、子供神楽もやめて4年くらいで、地域のお祭りが衰退している。これをどうしたらよいかと思った時に、定住、移住者、それから二地域居住とかがありますが、地域のお母さんたちが、その時期だけでいいので、今教える人がいるうちにそういう人たちをひっぱり地域のお祭りを手伝ってくださいと、そういう人たちが定住に繋がっていくとか、あまりハードルを高くしないで、簡単なところから難しいかもしれませんが、いろいろなそういうことで、お祭りを例にあげましたけど、いろいろなところであると思います。堅苦しく定住とかというのではなく、手伝ってくださいのような形で、まとまるということで、いろいろな人に協力をいただいて仕事ができるような、だんだん増やしていくような方向がとればいいのかと思っています。もうひとつ2月にこの会議の提言が決まるということですが、たぶん冊子など出るか分からないですが、それを市民が見て、さあがんばろうと思うかというにあんな方向では、住みたくもないですよ。市に繋げるエネルギーをどういうふうにつかということがすごく重要だと思います。ここだけの話ではなく、活性化させるためのエネルギーをどうもつかということが重要ではないかと思っています。

(伊藤コーディネーター)

今、最後におっしゃったことが、非常に重要なことで、言い方が悪いかもしれないが、こういうかたちでトップダウンになりがちなので、トップダウンでは動かないですよ。みなさんが、こういうふうの下から市民のレベルでどうやって、そういう方向性に向かってみんなで頑張っていけるか、そのへんの工夫が必要ですよ。

(関委員)

私はもともと東京の人間ですが、外部からの目でみるとやはり地域というのはこの世代、団塊の世代より上の方々が作ってきて、今でも引っ

張られている。だんだんその方が65歳前後になってきて、もう早い人は70歳になってくると減速感が出てきて、持続可能とおっしゃるならば次の世代がいなければ、いけないが、居ないですよ。これは事実ですね。この世代、山崎さんの世代が頑張れたのは地域が生業の場だったからです。頑張ればある程度お金になって、生活ができた、農業でなんとかあった。だからみなさん集団活動とか、いろいろな活動をやって頑張ったけれど、今は結局、生業の場でなくなった。長男だから残っている。消防で一緒になるけれど、何か地域で楽しむ気持ちもないし、あわよくば運よく、まちから出てこっちのほうに住みたいという気持ちを持たれているのが、だいたい多数かと思います。地域活性化といえば都市部と農村部の意味合いが全然違います。今も東和の山奥では、山に向かって水道事業やっています。安齋さんがおっしゃるように、効率が悪くても平気でやるんです。それも考えものでしょうけれども。やはり一カ所に人を集めて集中的に、効率よくというのは、都市の発想、効率の悪い中で、どうすればいいかという智慧はもう少し出していかなければ、なにかハードが出来たからといって人がくるわけではないので、結局、比較の問題ですから、都会の方がいいと行くのが現実なんです。ここが生業の場になるためにみんなで知恵を出せるようにしなければいけない。だから地域振興を考える中で、文化や歴史や食べ物は大事です。我々、地でやっている人間としては、もうちょっと踏み込んで今住んでいる自分として、外部から来た人間にしてみれば、農村が、まち場に比べれば歴史があるのではなく、自分たちで歴史をつくる。飛び込んでチャレンジできる。学んだということを私は伝えたい。農村は、逆に今は自由なんだ。好きなことができるんだ。そういうようにあるものをブラッシュアップして磨き上げて、すごいものをつくるのもいいが、新しく湧きおこってくる。なにかこういうものを支えていく、だから話が戻っていくと、人材育成なんだ。人はチャンスを与えられても気がつかない人もいっぱいいるんですね。やはりチャンス与える場をつくって、昔、藩校があって育ったように二本松独自の、学校をうまく使ったり、人づくりをしっかりと。田舎には田舎の良さがあって、生業をつくるんだ、都市には都市で。お互いが都市と農村が均衡ある発展を遂げられるように、双方の人材を交流させながらできれば良くなっていくんだらうな。そこしかあるものを競

うのは限界があるけれど、どんどん人材さえ育てば新しいものがどんどんでてくるので、そうゆう所の知恵比べもできる場を市内に持てれば、すごく私もよいと思う。地域が好きな人を育てたい。

(伊藤コーディネーター)

先ほど、勘違いだと思うけど、いい学校に行くと自分も勉強できるようになるかもしれないと思うということは事実なんです。人間環境の問題、動物だからいい環境に引っ張られるのですよ。悪い環境だと引っ張られちゃうのですよ。非常に優秀で勉強をしっかりとやるぞという子たちが集まっている中にいると、そうではない子もそうなるのですよ。ですから勘違いではなく、本当の人間のポテンシャルというのは、かなりあって環境によって全然変わりうるのです。

(安齋委員)

移動手段は僕の時代は少なかった。交流というのはそこなんです。隣の油井小学校は、岳下小学校へ行くんですよ。これがものすごい刺激となる。弁論大会、絵、交流をしてください。家をつくってもらっていどうすることは大変な話です。考えますと。そうすると井の中の蛙ではなけれど、私は、あれでもものすごい刺激を受けました。

(伊藤コーディネーター)

大学も同じで最近いろいろなイベントで人が集まって、イノベーションキャンプみたいにそういうのだと、すごい刺激をもらって帰ってくるんです。それで成長する。そういうことがすごく大事なんです。

それは行政とか教育委員会で出来ることです。

(黒川委員)

関さんは今どのようなことをされていますか。具体的に

(関委員)

農業です。農業が斜陽産業になった理由は、私が自分なりに定義すると農業は結局生産者が農協に出荷します。農協は流すだけ結局流通リス

ク、販売リスクが、全部農家に押し付けられていて、自分で値段をつけて売ることが出来ない。だから儲かる事業として再生産できなくなっている。だんだん規模を大きくしてなんとかしなさいとそうではない。その入口から変える仕組みをつくって、自分はそういうことは農家だから自分で作って、そこに物流もセットで物を流す仕組みを作っている。逆に言うと農業は儲かる。苦労は多いけど。

(黒川委員)

いろいろなやり方があって、デジタルテクノロジーで、いろいろ発電できる今までと違うことです。全体で長生きしているから、28%が65歳以上なんだから日本は。みんな大都市に行くのはそういうトレンドだから。だからますます過疎になってきて、みんな核家族になっているから。どこでも共通の問題ですね。東京都では、みんなそういう社会的な問題に自分でやっているNGOである程度成功している人達を9組呼んだんですよ。ものすごくみんなびっくりしていた。例えば、東北の大震災で、新しい人が外から来ていろいろな意味で、新しい事業を始めている。結構ある。宮城県だと亘理もやっているのだけれど。地元の良さをどうやって活かすかと考えているが、全部、マーケットが世界を相手にしている。突然、気仙沼の、あの人はブータンに行って月給2万円位の総理のアドバイザーになって、震災になって大変だと帰ってきて、気仙沼は関係ないけど、そこでいろいろやっていたら、そこにいるアセットとは何か。漁師さんだから縫うのがうまい女性達が、網が壊れるから。これがものすごい上手なんです。なにか活かさないかと考えていたら、スコットランドにおじいちゃんのセーターをみんな大事にしている。厚手の物売るかという話で、すごくうまくできるようになって、どうやって売ったかというネット英語で出して、そういうの売らないのです。注文が来たら売るので。

すごく儲かって。その女性たちは、すごい元気になって、自分たちは世界と繋がっているという発想をする人。そのローカルな気仙沼の漁師の女性たちがみんな大元気になって、世界から自分たちは注目されているからのような発想。みんな高齢社会で過疎化しているのは、どこでも同じ条件だから、何もここに特有なことではなくて、先々週、カナダ大

学で話をしてきたが、新入生と医学部の大学生と両方お話ししたのですが、大学にはいろいろな知恵があるが、どうやって売るか、どういう理由があるのか見に行った。結構厳しいらしいが、例えばセブンみたいな全国展開しているところに何かできないか。ローカルなすごくユニークな場所でね。やっているとは思いますが、そこにその人たちだとあつという間にセブン全部に情報が広がるとか。もうひとつはJRAもそうですが、みんな農家の男性たちがいちごを上手に作る。彼らはITの会社を辞めてITを使ってもっと良くする。写真でとるとオランダに出したら1位をとった。その男性もやる気になっている。だからどうやって今ある特殊な能力の人たちを世界のマーケットを相手にしてどうやるかというのがすごい大事な発想です。

また、大学に相談に行くとか、やってみるのはすごく大事で、しかし相談に行くということ自体が負けじゃないかなと。わざわざNGOやってある程度成功してきた人呼んできて、オイシックスだってそうです。東北で震災で福島で放射能という時に全部自分たちでガイガーカウンターを持って行って、そこでとったものを自分たちで計って、自分たちはこれ大丈夫です。そのかわり少し高いですが、売れるんです。みんな心配だから。みんな政府の言う事は信用していない。こういう時代にそういうことがチャンス。高くてもあれば売れる。お母さんは子供のために売れるんです。それがもし失敗したらガンとやられてしまうけれど。

福島という名前そのものが世界中のブランドになってしまっている。ここで何をするかというのが、すごく大事になってくる。ひとつは大学にある智恵は何か。大学の先生はそういうマインドでやっているわけではない。大学の学生さんもそうだから。ネットなんかやめませんかとどんどん投げかけて、勝手につくってもらう。そういう発想かなと思う。東北も同じ問題を抱えている。ここは一体、他の過疎の、東北も四国もそうですが何の強みがあるか。これをユニークなんだが、この間も話した男の子がいて二人目が双子だったという女性がいて、これが都会ではたいへんなんです。男の子一人7歳の子がいて、2人になったとたんにものがすごい、どうして運転するわけではないから、自転車で危ないので後ろに二人縦につけるように自転車を作ってもらった。後は2輪車で。これを、どこも作ってくれない。これをやってくれないんですどこ行って

も。ある会社に行ったら、その人がやってあげようと作って試作したら、乗り心地が良いが危ない。自転車で前と後ろに乗せる、後ろを2輪車にして。それでようやく試作品を作ってくれたらすごく良いが、量産してくれない。彼女はネットのメールでこういうの作ってもらったよと色々出すと、ほしいという方がたくさんでる。5000人ほしいと作ってくださいという話をしたら、オランダは自転車好きですよ。それがまた人気になってフランスからほしいという方が出ている。ニーズはどこかにあるはず。だからネットがつくれないというのは全然言い訳にはならない。大学院生はそういうことが大好きな人がいる。いまポケモンゴロをつかった子供だって、会ってみたらよい子で子供のころから日本語が話せなかったが、話せるようになって。数学大好きゲームが大好きと言っているうちに向こうで雇われて、それをやった。そのへんてこりんの才能をどう活かすか。今のチャンスはものすごくあるんだと、突然一人の人が外に行ってしまうので、それを一番ユニークなものは、私はダートマスやイェールではないかと思っている。あの一人のひとでこれだけ話題になっているのはいったいなんでしょう。そういう実体験があったということが、すごく大事なんです。前からいっているとおりこの間も15人学生が来た。若い人たちがみんな来て聞いている。あのイェールにいる二人の人たちが日本人でもないのに、朝から日本訳だと古い字読めないのに読み解いて、日本語をしゃべっている。感動しますよね。そうゆう今のダートマスに行って誰か交渉してきてほしい。イェールで交渉してきてほしい。毎年せめて一人くらいはとってくださいといってくると、彼らは二本松が大好きに決まっているから、そういう人達がそういうことをいうとか。10年とか15年先です。日本中、同じ問題を抱えている。「朝河さんで毎年行っている」

という話はここにしかない。それをどうやって市長さんところでネットで言いましょというのはダメですね。好きな人に勝手にやっていただく。ほとんどただですから。学校の先生にやりましょとすごく大事だし、学校の先生もだんだん好きになってくると思います。

(富樫委員)

福島県がその件に関しましては、知財を活かす、創業を支援する面に

補助金がたくさんある。それを使うとプレゼンテーションでみんな挫折してしまう。

(黒川委員)

それもそうですが、みんなが考えてやれるようなことは、もうやっていますよ。人が考えないところをどうやるかが一番大事で、今の銀行はかなり力を入れています。そちらは、太田さんですが、なんで海外にもっていったのか聞かせてほしい。

とんでもなく世界に行くという話、それを自然にやれるダートマスにいった子が、そのあと何をするかで、いったんそういうことをすると自然に出てくるので、海外に出ないと分からない。みんなデジタルで知ったかぶりをしているけど体験がない。体験している人の強みが全部出てくるわけではないが、とんでもない人が出てくる可能性はすごくある。これは全体的な話から。

(太田委員)

アイビーリーグに留学させるのに年間 500 万円位かかる相当、地方の子にはなかなか親は出してやれない。

(中野委員)

私の住んでいるところは、非常に自然豊かなところで、自然が大好きです。山に住んでいるというところでは好きで住んでいる。まちの中は、賑やかな方がいいだろうけど、好きでいる人達もいるという事も考えて頂けたらいいと思います。

お話を聞かせていただいたのですが、この間、学校見学をどこの学校もやっているものですから、杉田小学校に行かせてもらったりしたのですが、玉井小学校行かせてもらったのですが、大玉村は弟の子供がいる。大玉村に住んでいることをとても良いことだということで、教育そのものが大玉村だとどれほどいいか。小学校で学年ごとにやるのですが、私は企業勤めの時にコミュニティデザインの勉強をしていたのですが、大玉村のコミュニティデザインの中で、コミュニティデザインは人と人の繋がりがとても重要なことを勉強していきまして、班ごとに村のコミュニ

ティデザインは人と人の繋がりでどういうところがあるのかというのを班ごとに勉強して校長先生にプレゼンするという授業をやっていました。こういうことは、すごく大事なのではと思っています。二本松で生活をさせていただいているのですが、非常に批判的な、二本松だからしょうがないわよというような事を言われる方が非常に多くて、本当に素晴らしい市で自然もあったり資源もあったりすごくいいところなんです、私も宇都宮や大宮に住んでいたりして、二本松で仕事をさせていただいて幸せだなと思うくらい人もいます。とてもいいところですが、自分たちのことを褒める人たちがあまりいらっしやらない。残念なところで、その授業をみたときに二本松はいいよという授業をやっているのかなと、ちょっと不安に思いました。人口や子育てのほうも大玉に負けているのではないですけど、大人になってから二本松に帰ってきてほしいけれど、やはり大玉村は素晴らしいよと教育していれば、大玉村に戻って何か貢献したいと思う人たちも増えたのかなと。戦略的にやられているのかなと思う所がありました。

人との繋がりということは、私も二本松が好きだから、いろいろなところを教えてあげますが、例えば交流センターにいさせていただいておりますが、良い場所だと思います。いろいろな授業をやったらいいのになと思うけれども、職員だけではとてもじゃないけどまわしきれない。だからサポーターみたいなのをつくったらいいと思っておりますが、なかなかそうはいかない。有償とか無償とかありますが必ずしも有償でなければならない、そこには、何か価値をもっていかないといけないのだろうと思う。やりたいと思う人はたくさんいますが、その場がないというのが事実なのかな。私の事業の中でも、お給料を払わなければいけないのかという払わなくても一緒にやってくれるかたもいるので、サポーターズクラブのようなものを自分たちで作っていかうかなと考えております。

(佐藤委員)

第1回目の会議のあとは、ロシアから帰ってきて一週間、ヨーロッパに行ってきました。ブタペストとプラハとウィーンとオーストリアの4か国を観てきました。私は、市の委員でありますので、いろいろ一生懸

命観てきました。二本松には何もないんだ。がっかりしながら何かないかなと思って。昔からそうなんです、私はよそに行くと二本松市と比べて、ああいうことができないか、こういうことができないかと、いつも考えています。あと市の方にも、たまに提言をする。やってくれない。簡単なことをやれないから大きいことも出来ない。

それからお城山の問題にしても昨日今日じゃなくても 30 年も前からお城山に門を作ろう、どうしようこうしよう。なぜできないのかな。今度は市長も一生懸命やる気になった。10 年先、20 年先を考えて意見を聞いて私は働くことしかわかりませんし、働いて 77 歳です。観てきてがっかりしながらも、まちとか観光というのは、やはり作っていくのだろう。それを 10 年かけてつくる。10 年先の計画を立ててここだけやってもらう。こうしようと形の中やっていると。確かに二本松は、私は運送業をやっていますから、全国はいろいろな運送業を知っています。福島県でも二本松は本当に人、人柄がいいんです。ヨーロッパから帰ってきてから雑誌の記者が来て、どうでしたと聞かれ、二本松はあきらめた。なにを言っているのですか安達太良山、阿武隈川、お城山があるではないか。昔を考えてはダメで、それをどういかにするかということ。

今、安齋さんから安達ヶ原の鬼婆はすばらしいですよ。涙が出るくらいすばらしいストーリーなんです。二本松の人が何人知っているか。安達ヶ原のお寺と市がタックしてないのでしょう。何十年かかっている。今、東和の針道から川俣に広がった山中に放射能の残骸の燃やす焼却炉をつくる。ここは 3 年かけて使う。そして 88%~90%は公害ではない。二本松市内につくってほしい。それでなければ安達ヶ原に鬼婆のところに作ってもらって、温泉を常に今終わったあと市で一般的に国のものを使って 10 年は使えるでしょう。どんなことをしても。そういうチャンスを後ろの人がしっかりしてほしい。後ろの人がしっかりしていないと市も伸びない。市長が一生懸命でも。常に思いながら。よろしく願いいたします。

(伊藤コーディネーター)

今までの話を踏まえて、先程のタイムスケジュールを踏まえるとなんらかの方向性、共通項なりを見出さないといけないかなと思っています。

最初は遺品や歴史、観光という話だったのですが、次世代の育成をどうするか。あるいは教育をどうするかという話が出てきて、残念ながら高度教育機関はないので、高校まで。高校も出来のいい子は郡山や福島に行ってしまうという現状がある。少なくとも小中は、がっちりやって二本松の小中学校に行くとみんな伸びるよ。そのくらいの評判が上がるようなそんなことにしたいと、たぶんみなさんの思いだと思います。

(安齋委員)

そうゆうふうには思わない。Cクラス。Aクラスじゃない。子供の教育とはつめこみやって上がったらいいかとは私は、疑問に思っている。それよりも学校の交流とは、いろいろなことを知ることにより、これはいかんこれはいかん。そのことだけでも大きな教育だと自分で体験談です。だからレベルが高いところに行ったらこういう立派な先生ができる。それはわかります。その同じ学校に行ってもそうでない人もいます。平均的には多いです。自分で考える、自分で何かを克服していく。そういう意欲は違う所で育てられる。そのために交流などのチャンスあるいは、気づきのチャンスを与えてやる。

(伊藤コーディネーター)

要するに勉強のための勉強ではダメなんです。何か自分が何かしたいからこういう勉強がしたい。そういうようなものになるようなことが、若いときに持たせなければならない。

たぶんつめこみをやって学力が上がったというだけでは、後々伸びしろがないんです。そういうふうにながら、学力も上がっていかないとダメだと思う。やはりよそから来ていただくということを考えると、二本松に行ったらろくな高校に行きませんよということになるとなかなか若いお母さんたちも来ていただけないということですので、小中学校のレベルを上げるということは、今おっしゃったように単につめこみ勉強のレベルを上げるというだけではなく、本当に何で勉強をするのかということも含めて、その交流の刺激を得るといのもいいですが、そういうことを経験させながら勉強していく。単なる勉強ではなく勉強ではない勉強ができるような、そういう自由で自主性みたいなものを発揮でき

るように。

今、大学生で心配しているのが、当事者意識の欠如というのがあるのです。自分のことを自分事だと考えてくれないという。例えば、就職活動は今就活ルール廃止というのが問題になっているが、結局なぜ就活をするかという親や先生がいうから、時期がきたから。自分がこれから生きていかなければならない。働かなければいけない。だから自分は何かを見つけたんだという当事者意識ではなく、周りが言うからやるだけなんです。小学校中学校も同じで周りがやるからやるだけではなくて、当事者意識をちゃんと持たせる。それは何のために勉強するのかちゃんと考えるとそういうような教育をすればたぶんテクニク的なことをしっかりやるよりも、もっともっと伸びしろがあるのではないかと思います。

(安齋委員)

若い子供達だけでなく、スポーツも含めて、まさに教育そのものなんです。本当にスポーツをやって努力化すると、あれこそ当事者意識があって、そうして我々は郡大会、県北地区大会、県大会そういうふうにレベルがあった。世の中でこんなにうまいやつがいるのかと、そういう経験が、だから市教育委員会がこういう機会を与えてほしいですね。

(黒川委員)

文部省でも今そういう人が困っていて、今までは今までの知識を覚えさせているだけだから、それが、検定書や教科書だから、これを全国でやっているのは日本くらいです。その結局の目的は、偏差値上げる中、高校まできている。そこで序列が決まる。

入るためにはアメリカでは入試があると思っているのかと、自民党にいったのですが、前々違うそんなことも知らない、えらい先生方は困るなど言ったんです。みんなどうやって大学の生徒をとっているのかという話を基本もわからない人たちが、エリートだからすごいこまるのですよという話はしていますが、特にインペリアル教授がそんなことも知らないと本当に情けない話。彼らは日本から見ると一番その分野の権威と思われているだけなんだから。だけど入るとき東京大学など、わかる

けど日本だけです。そんなことさえもインペリアル教授がいいもしない一番の問題である。教育崩壊と文科省でも言っている。文科省も知っております。それで済むわけもなく、いちいち文科省に相談にいかなければならない。勝手にやってくれてもいいんだよといたしますけど、だけどそれが常識だと思っているからすべての教育がそうになってしまっている。

つまりみんな画一的になってきている。偏差値も。社会、国語、英語、理科をやれといっても無理だよ。やはり数学と理科がだけ出来るやつをとってもいいわけだ。そうゆうシステムになっていない。

企業がそれでうまくいっているとみんな思っているから、それであがってきたから偏差値で入った人が一括で採用させて付度しながらあがっただけの人。

(伊藤コーディネーター)

例えば経団連は、大学改革とかいう訳ですよ。ところが経団連加盟企業のアンケートをみると採用の時に何を重視しますかという、成績というのはほんの少しなんです。

(黒川委員)

だからそれが終焉になっているのに、それで付度してあがってきた人ばかりがあがっている。創業するとか自分の家業を作った人の方がよっぽど強いですよ。孫さん、柳井さんもそうだし、すごい苦勞しながらここまできている。そんなことやったことない。イエスマンがあがっているから。話を経団連にあって、中西さんにみんなトップがなかにしさんの少しはあの人には挫折をしているから、挫折をしたことがないひとばかり。何にも自分の意見を言って決めたことがある人がいない、同友会が今、小林さんだからまだましなんだけど、川村さん中西さんも、バーツと言って交渉してきてしまう、三村さんは立派だ。大企業のあのぐらいのちゃんと見識があって、自分の言葉で発信するということが大事なんです。

(安齋委員)

世界のレベルとかの評価のシステムも我々も変えていかないとダメ。それはアンチじゃない。

(黒川委員)

実体験で何をしたのか。

(太田委員)

二本松にJICA訓練所という施設がありますが、あれで帰ってきた人達は、本当の当事者意識がなければ生きぬいていけない。優秀だがなかなか二本松に就職してくれない。そういう人達が小中学校に行って話をして、異文化ってアメリカ、ヨーロッパの異文化じゃなくアフリカ・アジアに異文化を経験できたらいいなと思います。

(黒川委員)

例えば、この後毎年一人か二人ダートマスが取ってくれるとインパクトが大きくなる。それをやってくるのは、なぜ私と、ずっといっていたじゃない。

(安齋委員)

JICAのトップと市長が会うのではなく、今おっしゃっていた、小学校、中学校に全然異質だからそういうのがなさすぎる。

(黒川委員)

朝河貫一もみていると若いころみんな読んでいるでしょう。無意識に自分の中のノベルティになる。最近、歌舞伎の話を知っていると子供の時から全部セリフを覚えさせる。高校生ぐらいになってから覚えさせるのはダメで、理屈で考えますから。今、団十郎の男の子をみているとただひたすらセリフを覚えさせるのです。何も考えないで。みんなしゃべるんです。学校へ行きだしたてから覚えさせてもダメなんです。それは伝統的にしていることなんです。この間みていたら脳の細胞は10歳くらいまでにもっと大きくなって、それから減りだす。10歳くらいまでに経験値、ヨーロッパみたいに、5・6ヶ国語の違った言葉をみんな子供は

しゃべれる。海外に行った子供というのは、だいたい10歳くらい前までにやらないとネイティブではない。しゃべれない。脳のキャパシティは、若いときに10歳くらいまで増えているらしいが、使わなかったらいらないといって減ってしまう。子供の成長の話と合っているのかな。外国からきている先生は二本松で何人くらいいるのしょう。

(富樫委員)

我々がレベルが低いからなっているのだと思うのです。それをイメージチェンジするとすれば、例えば今年功序列が残っている。風習が逆に重しになっている部分がある。そうすると部落の中でもやらない。おさえられる。能力主義にどこまでもっていけるか。

(伊藤コーディネーター)

県や市のいろいろな市議会や委員会をやっていまして、感じるのは、今日お集まりになっている方は民間の方、公務員の方の意識とか考え方というものが非常に型にはまっているのか、大学では行政政策学類の公務員養成学部のようなところがあります。そういう子はみんな良い子なんです。良い子でみんな優等生のような。そういう子が公務員になったり先生になったりする。そうするとやはりそういう子たちが育てたり行政をリードするから、おもしろみのない人しか生まれない。そういう構造になっているのかもしれない。公務員の人はずいぶん30歳、40歳、50歳でもいいから、外へ出て例えば大学に戻って学び直すとか。今、大学で土日だけで修了できるマスターがある。キャリアプログラムというものなのですが。そういうふうに公務員が役所の中だけで重なっていると、どんないい話が出て、それをうまく行政に繋げるといえることがなかなかできなくて、年功序列じゃないですけど、自分たちの失敗がないように、とりあえずいいやという、定年まで勤めあげればいいや、みたいなそういう感覚の人が公務員になって役人になったり、先生になったりしていると、地域はよくはならないのではと最近感じていることです。

(富樫委員)

実はですね、三保市長さんになった時にこういう会議をつくってくだ

さいといいだしたんです。なぜなら結局公務員の方たちは優秀なんです。優秀だけれどたぶんやれない。やれというのは無理なんです。ここに先生方がお集まりいただき、提言というかたちで、それを隠れ蓑として、我々がこういう力があるよと応援するためにつくってほしいとお願いした。だからここで提言として出して、ここにいる若い人が、もう年功序列は関係ないとかういくなだと与えてくれればいくのではないかと思います。それはプロジェクトチームでやっていかないと無理だと思う。何々課でやりますとやっていると、無理だと思います。そういうことを逆にこの会を出して言って、そして何かひとつプロジェクトチームを作って、観光系なら観光関係。私、道の駅をやっていました。道の駅をやっていてスカイピアありますよね、スカイピアに温泉があるのです。今回ボルダリングを作った。そうゆうスポーツの大学とか何かの合宿みたいな誘致できないかなと思っています。

(伊藤コーディネーター)

音楽サークルが東京とかから来て合宿をするペンションがある。イノセントエイジという。そこはスタジオがあったり、結構東京の大学の学生が合宿に来ます。

(富樫委員)

そういうのだと人材、スポーツだけでなく来る方とそこで地元との交流もおのずとおこると思います。ここで練習した人たちが、一流になっていけば、自信がつきます。例えばスカイピアでは、トレーニングに使えるようになっていて、箱根駅伝にできるような大学が駅伝部が合宿しました。昔の旧道を通って岳温泉まで約 15 km です。箱根の山のテイストと似ているのではないかなと思っています。そういうふうのものをやると合宿している間いますよね。そうすると宿泊施設が必要になる。それが安くなければならない。そういうふうにやっていけばちょっと違うものが出てくるのではないかな。まして東和にはカヌーがあるでしょう。あとはボルダリングもできたし、二本松市ではプールを新しくした。道の駅、スカイピアあたりにロッジがあった。ここで大学の合宿で使えないかなとずいぶん考えた。

(安齋委員)

行政にやってもらうのもそうなのですが、我々二本松の人たちは宣伝、アピールするのが一番苦手です。会津若松では白虎隊はなにもしていない。福島はもともと人工のまちです。郡山は疎水によってももとは福島県人ではない。薩長武士の帰れなかった人達ですね。二本松には歴史がある。大地の上にあるまちです。だから二本松と本宮ですね。震災の影響も少ない。しかし伝統、歴史をひたすら静かにして、お祭りだって自分たちだけで、なんと酒を世界に売ったのは、この人だけです。本当にそういう意味で控えめです。

(黒川委員)

マラソンについて震災のあたりで、仙台の先の登米のマラソンをご存知ですか。ワイナリーでいろんなものをやりながらフランスのまねしているだけです。それを取材してきて、そこの地元のものを食べながらゆっくり楽しむマラソンですが、結構たくさんの方が集まる。いろいろな知恵をだしてやっている。

(糠沢委員)

例えば、人材育成に人づくりも学力だけでなく心の問題ですね。世の中を大局観を持って、今から日本、世界がみれるようなそういう心の豊かな人材育成をする。これはまさに二本松藩の敬学館教育の中で文武両道だったんですね。4 つくらいある剣道の道場と学力をつくる。もともとの敬学館が合体している。ちょうど江戸中期、よく学び、よく遊び、朝河貫一の父親の朝河まさるもまさにその環境でした。そのあたりの人材育成についてもそのへんの書き込みを、ただ市立という意味では、小、中学校ですか。あと幼児教育が大切になってくる。そういうことでひとつ年内にも柱になるまとめていただいて、3回目の会議にご提示いただいて。

(伊藤コーディネーター)

2月になって議論してでは、遅いと思っておりますので、それまでに

なんらかのかたちをつくってそれを事前に皆さんにお伝えして、最後の修正をするぐらいの形でないとタイムスケジュール的には間に合わない。たぶんご意見言い尽くせない部分があるかもしれないとお話があったのですが、大体、皆さんのご意向、雰囲気は出たのかなというのは感じますので、みなさんが 100%ご満足していただけるものができる自信はまったくない。まったくないけどもとりあえず今までのみなさんのご意見を踏まえて、何らかのかたちで、ペーパーにしたものを年内でできるかどうかわかりませんが、おそらく2月の会議のちょっと手前位までには、事務方といろいろ頭をひねりながらやります。

(糠沢委員)

安部政権が国難ともいうべき少子高齢化を指摘しているのは、実は団塊の世代の全員が75歳以上の後期高齢者なんです。2025年問題なんです。2025年の前年くらいまでには、ここの提言が、少し熟されて市政にちゃんと反映できるような仕組みにしないと、せっかく三保市長のもとにこうして私共が集まった意味がないものですから。私は少子高齢化を世界から一番の日本が戻るのですから。二本松もその地区ですから。先ほどは町内会のお祭りも繋がっていない、農業後継者もどうなっているか。関さんからお話しがあったその現実を踏まえて提言に反映させないと絵に描いた餅になってしまう。その点をよろしくお願いしたい。

(安斎委員)

市長に提言してあとは恐れなくてやってくれと全部やることは難しい。すぐできることからやるというのは普通なんです。できることはだれでもできる。できないことをやはり市長自身が挑戦してくれないとそれはどう選択するかは市長です。ひとつひとつやってもらったほうがいいです。

(伊藤コーディネーター)

私が中心となって役所の人と、やろうかという話をしていました。今までいろいろな2回の会議でご意見でましたし、できれば正月明けくらいにはなんとか正月休みの宿題ということで承りますので、それでは正

月明けには、なんらかのかたちでみなさんにお伝えできるような感じでやっていきたいと思います。他に最後言っておきたいこと、これをぜひともいれてほしいことがありましたらどうぞ。

(山崎委員)

どなかたストーリー性が必要とお話があったが、本当にそれは必要だと思います。世の中から注目してもらうのにストーリーに沿ったものを軸にして進めることが、すごく必要だと思います。男女の愛とか親子の愛とかいろいろあると思いますが、出会いかどうかわからないが、市長さんの愛もあるでしょうし、その軸にして愛がある二本松だとかキャッチコピーをがっちとつくってそれを軸にして、何か作ったらいいかと思います。全然違いますが、東野物語の特別たいしたものがあるわけではないけど、バスガイドさんが川の流れの河童がいると観光になっている。凄いと思った。行ってきたのですが、それくらいキャッチコピーとか、ずうずうしさをもってやってもいいのかなと思いました。

(糠沢委員)

私は書いたんですよ。震災、原発事故から8年になりますが、よみがえる本当の空ね。二本松市しか使えないポスター。それから岳温泉と塩沢温泉に代表される安達太良山麓の温泉郷を活かせないか。これは理屈抜き。塩沢足湯温泉にしてもらいたいし、温泉をこの時期に豪華なホテル温泉ではなく、大衆の方々がすぐに入れるように、青森に行くとヒバの木のお風呂がある。温泉を活かさない手はない。二本松の財産です。大玉も先ほどでていましたが、安達太良山麓というのは、行政区域を越えての連携が必要になってくる。そこに国境線をつくってしまうと困ります。自分だけではなく観光を含めて。安達太良が岩手郡の早池峰山と共にハイカーの東北の双壁だった。そのハイカーの数が早池峰に比べるとこちらが激減した。これをなんとか回復しないとダメです。素晴らしい山です。

(中野委員)

少子化ではあるが、障害をもった子供がどんどん増えている状況であ

りますので、そのところからハンディキャップをもった人たちにやさしい地域づくり、まちづくりそこも入れていただけたらなと思っています。学校づくり専門学校もひとつあります。介護だけではなくそういう学校づくりも入れていただけてほしいなと思います。

(伊藤コーディネーター)

先程、二本松の人は人が良いというお話があったのですが、私はよそもので名古屋出身で、まさにそう思います。私は名古屋、東京、大阪に暮らしました。福島、二本松あるいは福島市を含めて非常にみんなやさしい人が良い。その話をしたら郡山の品川市長が、いややさしいだけでは地域を活性化しないとおっしゃったのですが、ちょっと意地悪な部分がないといけないのかなど。このやさしさは絶対魅力だし、失ってはいけないもの。あくまで愛であるとかやさしさであるとかいうものを二本松が失ってしまったら、つまらない気がします。そのあたりのところも含めてキャッチフレーズなり提言なりに活かしていけたらいいなと思っています。あまり期待しないで待っていてください。

(三保市長)

貴重な提言ご意見をいただいて同じ思いでいるところでそういう思いがあって、皆さまのご協力をいただきながら二本松未来戦略会議を設置させていただきました。できない理由を並べるのではなく、どうしたらできるか。やれるか。それ以外ありますか。

それから教育、人づくりについてのお話がありましたが、全く同じ思い米 100 俵の精神、本当に今大事だなとそう思っているところです。山崎さん市の教育委員をやっていたのでいつもお願いしていたのですが、私はすべての子供は天才。どこに生まれたから、どこに育っているからということではなく、それぞれ素晴らしいと思っている。何が大事かという、その子供達のやる気にどう火をつけるか。火がついて自活すれば伸びていると、そんなふうに信じています。そういう面では、そうした能力を伸張させることと、自活させることが今大事だなと。それはそういうことがあって朝河貫一博士も山川健次郎先生も、あるいはお話があったように高橋信二博士とか。あの逆境の中で、しかも戊辰戦争

間もない時に英語を自ら学んでやれた。そのことを思うとまだまだ可能性があのではないか。それから二本松の力、資源それらを最大限引き出しながらやっていかなければならない。この二本松から他に行くという事ではなく、ここにしっかり足を踏ん張って住んで本当に魅力あるひとりひとりが希望を持って豊かに暮らすことができる。総合的にそういう市を皆さんと一緒になってつくっていきたいと思っています。今、具体的にサイクリングの話もありましたが、実は4年前、不徳の致す所で、市長選挙落選して、自転車についての話がありましたが、二本松の切り札として安達太良山を登るコース。なぜかというハンドルのニットウハンドル、そのハンドルがあつて、そうゆう資源があつて何でできないのかという思いで国の日本の自転車の専門の見識が、そういう方たちにおいでいただいてコースを設定した。東京マラソンにでている人たちの7割が二本松でやったら参加したいと、時期も重ならないように二本松桜マラソンということで開催しました。そういう取り組みも、実はしてもらっているところですが、4年前のそうゆう状況でできないできました。みんさんと一緒になってそうした夢が実現できるように、夢に日付をつければ夢ではなくて計画になって実行できるのではないか。何のために生きてきているのか。何のために今いるのか。そんな思いを自問自答しながら、自戒しながらいるところです。一緒になってみなさんのアドバイスをいただきながら頑張っていきます。よろしく願いいたします。ありがとうございます。

(事務局)

伊藤先生、ありがとうございました。

また、今後の日程でございますが、

この「二本松市未来戦略会議」は、本年度3回の開催を予定しております。本日は、第2回目でありましたが、

第3回目の会議を年明けの2月15日金曜日に開催したいと考えており、皆様からのご意見、ご提言を取りまとめたいと考えております。ご予定のほど、よろしく願いいたします。

それでは、これにて、第2回二本松市未来戦略会議を終了といたします。本日は、ありがとうございました。